

# 青い髪のシリィン

女戦士エフエラ&シリィンシリーズ外伝

# ひかわ玲子



女戦士エフエラ&ジリオラシリーズ外伝

あお かみ  
青い髪<sup>かみ</sup>のシリーズ<sup>あお</sup> ①

---

|     |                    |
|-----|--------------------|
| 著 者 | ひ か わ 玲 子          |
| 発行者 | 塚 田 友 宏            |
| 発行所 | 株式会社 大 陸 書 房       |
|     | 〒113東京都文京区本郷2-3-9  |
|     | 電話03-3814-7441(販売) |
|     | 03-3817-0741(編集)   |
|     | 振替口座 東京1-56612番    |

印刷・製本 (株)萩原印刷所

---

乱丁・落丁のものは、小社またはお買求めの書店にてお取替え致します。  
定価はカバーに表示してあります。

© REIKO HIKAWA 1991 Printed in Japan  
ISBN4-8033-3237-1

エラ&ジリオラシリーズ外伝

# い髪のシリオン

1

ひかわ玲子

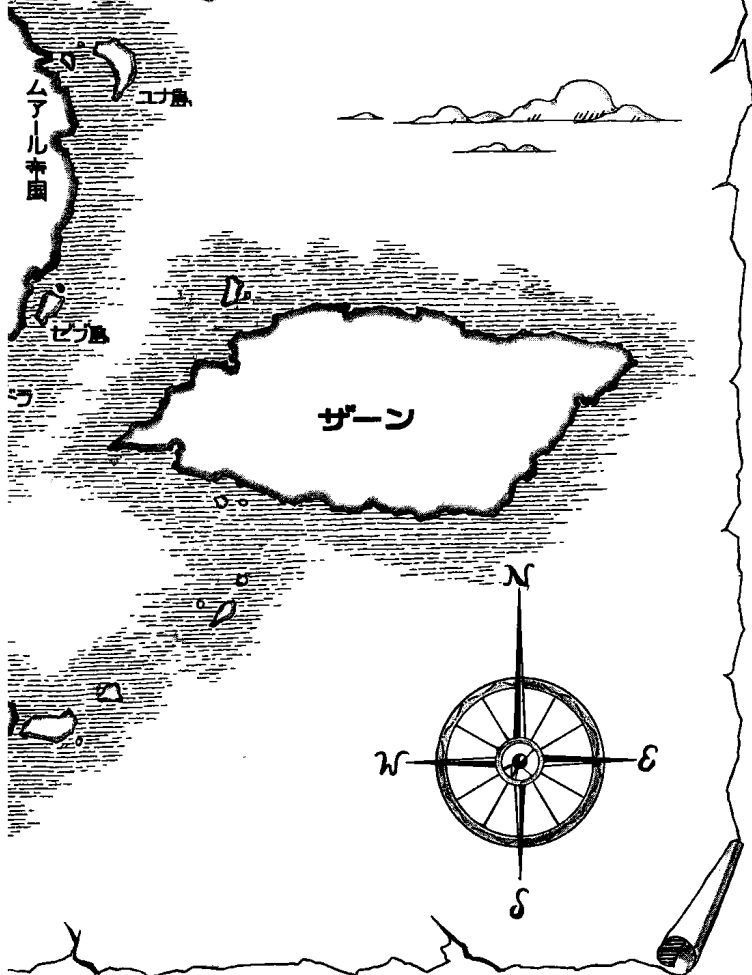


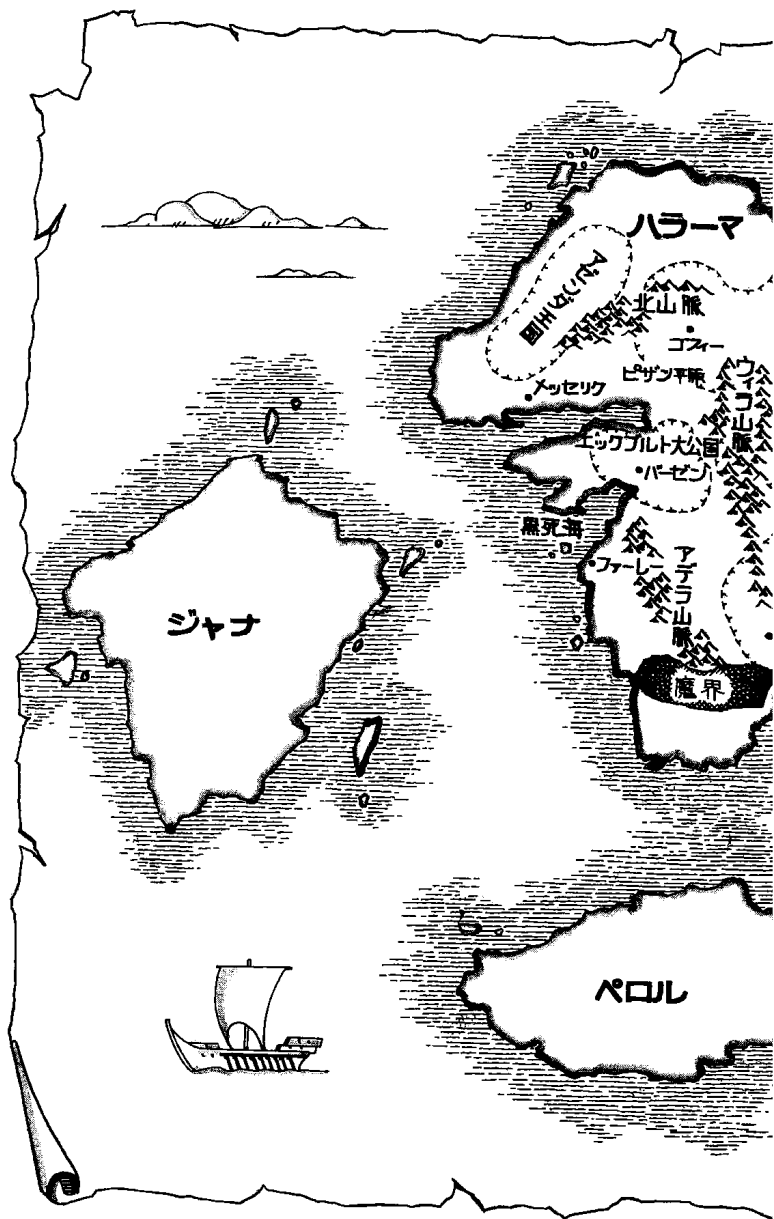
イラストレーション／姫野晶夫  
イラストレーション／米田仁士

## 目次

|                   |     |
|-------------------|-----|
| プロローグ             | 7   |
| 第一章 金の髪の少女、青い髪的少年 | 24  |
| 第二章 旅芸人の群れ        | 52  |
| 第三章 風の前触れ         | 101 |
| 第四章 ハラーマの戦雲       | 132 |
| 第五章 北山脈の冷たい風      | 173 |
| 第六章 アゼンダの狂王       | 204 |
| あとがき              | 244 |

# 四大大陸





## [ハラーマにおける暦]

16か月にて1年(太陰暦)

---

- 1月 火の陰月
  - 2月 オリガの土の月
  - 3月 水の陰月
  - 4月 ゼルクの水の月
  - 5月 風の陰月
  - 6月 ゼルクの風の月
  - 7月 土の陰月
  - 8月 オリガの二の土の月
  - 9月 オリガの風の月
  - 10月 ゼルクの土の月
  - 11月 火の二の陰月
  - 12月 オリガの火の月
  - 13月 ゼルクの二の風の月
  - 14月 オリガの水の月
  - 15月 水の二の陰月
  - 16月 ゼルクの火の月
-



## プロローグ

妖精たちが山の斜面に爛漫<sup>らんまん</sup>に咲き開く花々の合間を飛び交っている……何かを、誰かを捜すように。そして、その妖精たちを追うようにして、長い黒髪を三つ編みに編んだ少女が叫びながら斜面を降りてくる。年頃は、というと、ようやく背も伸び、体も丸みを帯び、その表情の子供っぽさに女らしさを加えようとしている……そんな境界<sup>はざま</sup>の年頃だ。

「シリーン……シリーン！」

少女は、必死で叫んでいる。

しかし、少女の叫び声に答える者はいない。

少女の叫び声は、次第に切迫した、焦<sup>あせ</sup>りを帯びたものになってくる。

「シリーン！ 一体、どこにいるのっ！」

出ていらっしやいってば！ ふざけるのもいい加減にしないと、母さまにうんとこさ叱られるから!! お尻をいやってほど撲<sup>ぶ</sup>たれるから！

今だったら一緒に謝<sup>あやま</sup>ってあげる……出てらっしやい！

シリーン！ あんまり世話を焼かせると、あたしだってもうあんたの分の食事なんか、作っ

てやんないから！ 飢え死にしたいの？……シリーン！」

声が飢<sup>こたま</sup>する。

返ってくるのは、少女の呼び掛けが飢<sup>こたま</sup>する声の断片ばかりだ。

「シリーン……姉さま、怒るからねっ！ 返事なさい！」

そう叫ぶなり、少女は声を途切らせた。

途方に暮れたように。

妖精たちが風に乗って戻ってきた。少女の耳元で何やら慌<sup>あわ</sup>てた様子でささやきかけたり、うなじにほつれの声は少女の意に添<sup>そ</sup>わなかったようだ。少女は、ぐい、と口元を引き結ぶと、決然<sup>けつぜん</sup>と茂<sup>も</sup>みを掻<sup>か</sup>き分けた。山の斜面をずんずん降りていく。

妖精たちはますます慌てた様子で、少女の肩から耳元にささやきかけたり、うなじにほつれた黒髪<sup>くろかみ</sup>を引っ張ったり、指を引いたりして、少女の前進を止めようとする。が、妖精たちの微<sup>び</sup>力<sup>りき</sup>では、少女の前進をとどめようもない。

そこへ。

強い調子の女性の声が斜面の下の方から飛んできた。

「ディオ！ そこにおいで！ こっちに来るんじゃないよっ！」

少女は、びたり、と足を止めた。

声<sup>こゑ</sup>がする方を向く。

「あんたがそこから出れば、物事はますます面倒くさくなる。母さまの心配を増やすんじゃないよっ！」

「……母さまっ！」

少女は叫び返した。

背の高い黒髪の女が、剣を手に登ってくる。

黒いマント、それに簡素な傭兵風の服を身につけている。大柄な女性である。たてがみのような黒髪が背中になびいている。

女は、少女を見上げると、剣を鞘へと戻した。

手を黒いズボンへとなすりつけると、その手でぼさぼさの髪を掻いた。

「母さま！」

女が側まで戻ってくるのを待って、ようやく少女はその傍らに駆け寄った。

並ぶと、ふたりの容貌はよく似ている。少女の愛らしい顔立ちとは、その母親を一回り小さくしただけの雛型のように見える。……にもかかわらず、女もまた愛らしいと言えるかどうか、というのは——その表情の猛々しさに完全に圧倒されてしまっているのだが。

少女は、母親の体から立ち上る異臭に顔をしかめた。

「母さま……殺ったの？」

「いや……」

女——ジリオラは、首を振った。

「たぶん、殺りそこなっただと思うよ。しつっこい奴らだ。困ったよ。どうやら、あの子は奴らに掴まったようだ」

「あの子……シリーン？」

「ああ」

少女は息を呑み、母に取りすがった。

「母さま……助けに行かなきゃ。あの子、要領悪いもの。それに、何をしでかすか……ねえ、母さま！」

「わかつてる。」

今、オーリンが確かめに行ってくれてるよ。夜までには一回、こっちに戻ってくる手筈になっっている。

とにかく、婆さまと相談してくるよ。

このことは母さまにまかせるんだ。いいね、ディオ！ 母さまと約束だよ。

シリーンのこととは、お前のせいじゃない。だから……いいね。お前は、村の結界の外へ出るんじゃない！

もう一度、言うよ！

お前は、この村を出ちゃいけない……わかったね？

シリーンの阿呆あほうのせいで、外は密偵みつていがうようよしてやがる。こんなんで、お前まで外へ出りや、飛んで火に入る夏の虫ってなもんさ。お前まであいづらに連れてかれて、帝都に閉じ込められでもした日には、母さまたちは、もうお手上げだ。  
ディオ……シリーンはまだ聞き分けのない子供だけど、お前はもうそんな年じゃない。わかるね？

母さまと婆さまをこれ以上困らせるな！ シリーンだけで、手一杯なんだから！」  
ディオラは母親の言葉に呑のまれるように、こくり、とうなずいた。  
が、その瞳がみるみると潤うるんで、涙でいっぱいになった。

「あたしが、目を離れたから……！」

しゃくりあげながら、ディオラはつぶやいた。

ジリオラは、そんな娘の頭をぐりぐりと撫なでた。

「シリーン……ひどい目に遭あうの、母さま？ 死んじやう？」

「さあね。死にはしない……殺しやしねえだろ」

ジリオラは、感情を押し殺した、つつけんどんな口調で答えた。泣いている娘を乱暴に引き寄せ、抱きかかえるようにして山の斜面を登りだす。

「でも……面倒なことにはなるかもしれない。まあ、少しは世間ってもんを知ってもいいかもしれないが、でも——まだあの子は子供だしね。」

でも、きつと帰ってくるよ。ここへ……お前と、母さまのところへ。  
だって、ここがあの子の家なんだから」

夜になった。

窓の外にはゼルクとオリガ、ふたつの月が出て、夜空を飾っている。

暖炉で火がばちばちとはぜて音を立てていた。が、その火は冬ほどには盛大に炎を上げていない。まだ少し夜は肌寒いが、それでも暖かい季節に向かっている……そんな季節だ。ゼルクの水の月にさしかかろうとしていた。

「家出……じゃな」

ほっほ、と老婆は楽しげに笑った。オレンジ色のゼルクの光、それにオリガの青ざめた月光の二条の光に照らし出されたその老婆の姿は、背が曲がって皺だらけ……外見からすると、一体どのくらいの歳を重ねているのかは見当もつかない。

「お婆……」

ジリオラは、その前で顔をしかめる。

「しかし……やりおるわい。」

あの子は変に聡い子じゃったから——もしかしたら、今の時期を狙ったのかもしれぬのお。

ハラーマの中原<sup>ちゅうげん</sup>は、今や一触即発の一番危うい時期……そなたもうかつには動けぬ。それを知って、今を狙って村の外に出おったとすれば、あの子も大物じゃの？

そなただとて人のことは言えまい？

そなたがあの子の王宮を家出したのは、今のあの子の歳とはたいして違うてはおらぬじやろうに。育ての親とはいえ、親にそっくりに似るものじゃのお……やることまでそっくりじや。

確かそなたが家出したのも、同じようなどさくさにまぎれてのことじゃったの」

「お婆……あたしをそんなふうにいじめたって、何の役にもたたないだらっ！」

全然違うよ！　だって、ここはムアールの宮廷じゃないんだよ！　何も……家出することあ……！」

「同じことじゃよ」

老婆……その見掛け以上に長生きしている妖精界を仕切る古魔術士、ダルーフオン婆は厳しく答えた。

「ここから……結界を張ってあるこの村の外へは一切出ること叶<sup>かな</sup>わぬ、という意味では。元氣いっぱいあの年頃の男の子にとっては、さぞかし不満であつたじやろうよ。

良いではないかね」

「お婆……！」

「あの子が外の世界を見て来たいというのなら、行かせてやれば良い。

そなたがあの子を守ろうとしているのはわかる。あの子は、そなたが育てた子じゃからな。しかし、守られるばかりでは、あの子は何も知ることが出来ぬ。自分ではばたくことを知ることとも出来ぬ……したが、大きゅうなったものじゃのお。ちっこくて、育たないかと思ったがの、最初に見た時には」

ジリオラは、口をつぐんだ。

その時。コトリ、と音がして、その光の中から溶け出るように……滑るように部屋にオーリン、金髪に緑の瞳の小さな少年が入ってきた。

月の光の中で、ジリオラの視線を受けて、少年はすまなそうに首を横に振った。駆け寄ってくると、ジリオラの手を取った。

か細い声が、オーリンの心話の音が、肌を通じてジリオラの心に伝わってきた。

(……ジリオラ……ごめん……だめ、追えない……連れてったの……ボザーン……)

「ボザーン……ボザーン公の手の者どもかい？」

(たぶん……确实……じゃない……けれど……)

ジリオラとダルーフォン婆は、顔を見合わせた。

「ボザーン公かい——執念深い奴らだ。まだ、結界の外をうろついてやがったのか……」

ジリオラは唸るようにつぶやいた。

「諦めぬよ。奴らは決して。——奴らがおる、ということは、わしも知っておったがの。しか



し、今のわしの力では、結界の外まで干涉する力はない……」

「うん。……ごめん、お婆。迷惑ばっかかけて」

ジリオラはすまなそうに言い、幻夢族の少年の細い体を抱き寄せると彼にも優しくささやきかけた。

「ごめん……寒かったろう、オーリン」

オーリンは首を振った。

（……ジリオラ……また、捜しに行く……きっと……連れて帰る……）

「いいよ、オーリン。そこまでお前に頼れない。危険すぎるし」

オーリンは、ジリオラの言葉に頑固に首を振った。

暖炉の前で……ジリオラは溜め息をついた。そして——ひとりごちるように、そっとつぶやいた。

「お婆。あたしが間違ってたんだらうか。」

シリーン……あの子が外へ出たがってたのは知ってたさ、もちろん！

でも、どうすれば良かったんだらう？

グルク老の求めに応じて、あの子をギルドにやるべきだったのかな？ そうすればあの子は少なくとも外の世界を知ることが出来た。

でも……それは、エフェの意には添わないことだってわかっていたし……。